『繡像百人 狂謌弄花集』（翻刻・上）

石川　了

本稿は若き日の本居内遠がまだ狂歌・戯作に遊んでいた頃に刊行した『繡像百人狂謌弄花集』大本一冊（文化十四年春刻成）の翻刻である。分量の都合で二回に分けて翻刻し、解題は「芸能文化史」第十四号（平成八年三月刊行予定）に掲載予定であることを初めにお断りしておきたい。

凡例

一、底本は大妻女子大学所蔵の初版を用い、虫損箇所については、同じく初版本の刈谷市立図書館村上文庫本（ただし国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムによる）を参照した。

一、題簽は底本に一部カスレがあるため、村上文庫本によった。

一、丁移りは原本の丁付と「オ」「ウ」によって、その各末尾に付記した。

一、序文（三丁分）と本文「五十一」オ以外はすべてに肖像画があるため、上段に半丁図二図を掲載し、下段にその部分の翻刻を行った。

一、原本本文は上部三分の一ほどと下部三分の二ほどの二段構成となっているので、半丁ごとに上部・下部の順で翻刻し、両者を区別するために下部の翻刻部分を□で囲った。

一、清濁は原本通りとしたが、句読点を私に付した。

一、漢字は原本通りをこころがけたが、俗字や旧字は一部の字を除き現行の字体に改めた。

一、くり返しの「ゝ」は「々」に改めた。

一、誤字・誤刻・誤記については、改めずにその文字の右又は左側に「・」を付すことを原則としたが、そのままでは意味やあるべき字がわかりにくい場合に限って訂正し、右側に「＊」を付した。

一、二段構成の原本上段本文は一部その半丁末で完結せず、次の半丁上段に続く。そのため本翻刻では右のケースは□で囲った下段本文をはさんで本文が続くことになる。そこで、この場合は末尾文字右側に「▼」、次の半丁冒頭に「▲」を付して続き先を示した。

一、諸本間の本文異同は本翻刻では注記等を一切せず、別稿の解題にまとめて記すこととした。

一、今回の「上」では序文三丁分と本文二十五丁分の合計二十八丁分を翻刻、次回「下」では残りの本文二十九分を翻刻して人名索引を付す予定である。

繍像百人

狂謌弄花集　全

（原題簽）

帆江はしめは觴をうかふる斗なるも楚に入て底なし。予額髪のころより和歌を賀邸先生にまなひ、はたちはかりより戯哥の癖ありて、しかも貞柳・卜養か風を庶幾せす。たゝに暁月の高古なる、幽斎の温雅なる、未得か俊逸、白玉翁の清爽なるすかたをしたひ、ことにつけつゝ口あみをになひ出し侍りし中に、臨期変約恋といふことを

今更に雲の下帯ひきしめて月のさハりの空ことそうき

とよみて先生にみせ侍りしに、この歌流俗のものにあらす、深く狂詠のおもむきを得たりと（序一オ）ほと〳〵賞し給へりしハ、三十とせあまりのむかしなりけり。其ころは友とする人はつかにふたり三人にて、月に花に予かもとにつとひて莫逆の媒とし侍りしに、四方赤良ハ予か詩友にてありしか、きたりて、おほよそ狂歌は時の興によりてこそよむなるを、ことかましくつとひをなしてよむしれものこそをこなれ、我もいさしれものゝ仲ま入せむとて、大根ふときてふものをともなひ来り、太木また木網・智恵内子をいさなひ来れハ、平秩東作・浜辺黒人なと類をもてあつまるに、二とせ（序一ゥ）はかり経て朱楽菅江また入来る。これまた賀邸の門にして和哥は予か兄なり。和歌のちからもて狂詠おのつから秀たり。かの人々より〳〵予かもとあるハ木網か庵につとひて、狂詠やうやくおこらんとす。赤良もとより高名の俊傑にしてその徒を東にひらき、菅江ハ北におこり、木網南にそはたち、予もまたゆくりなく西によりて、ともに狂詠の旗上せしより真顔・飯盛・金埒・光か輩ついておこり、これを世に狂哥の四天王と称せしも、飯盛ハことありて詠をとゝめ、光ハはやく（序二オ）黄泉の客となり、金埒ハ其業によりて詠を専とせす、真顔ひとり四方哥垣と名のりて今東都に跋扈し威霊のさかむなる、まことに草鞋大王なり。また一已の豪傑ならすや。是につきて名たゝるもの浅草に市人、玉池に三陀羅をはしめて枚挙するにいとまあらす。ついて尾陽・上毛・駿相・奥・羽・総・房・常・越より其外の国々のすき人、日をおひ月を越てさかむ也。かく世にひろこれるハ実に赤良・菅江かいさほしにして、予ハ只陳渉か旗あけのみなり。されとまた（序二ウ）臭を追ふの徒すくなからさる中に、尾陽はすへて予か門葉のみにして他の指揮をうけさるハ、まさに雪丸・田鶴丸・玉涌・金成・桃吉・有文の諸秀才、よく衆をいさなふ故なるへし。この比東都の諸大人の余国の歌を評するにも、尾陽を甲とし上毛・駿河これにつくと聞侍るに、予鼻うこめくはかりなるは、けに我をおこす輩といふへし。こたひ玉涌翁此冊子を人に託して四方の諸君の詠をこひ、弄花集と題して序を予にもとむ。もとよりいなむへきにもあらねハ、案文の（序三オ）つたなきをかへりみす筆を酔竹菴にとるなるへし

寛政九
丁巳仲夏　　唐衣橘洲

右ハ故方十園玉涌所蔵の弄花集といへる雅帖の序なり。こは此集の序に用ふへきことにハあらねと、今吾妻ふりのときめく世にしあなれは、そのはしめをしらせんためにしるしつけてよと、耳風かもとめによて書之

積素亭（序三ウ）

（一オ）

織田右大臣【像】
なれあかぬなしミの中のうはくちを人にすハせんことをしけれ
心正しからぬ僧を見て　豊臣太閤【像】
上人は霞の衣雰の珠数あまりはれせぬ空念仏かな
柴田修理亮勝家【像】
小敵よよわき敵とて油断すなあなとる故におちをこそとれ

橘五園源香美　初号竹逸園千広【像】清画
きて見れは花の香高くにほふなり桜かさねの衣手の森

（一オ）

（一ウ）

木下長嘯子【像】
みな人のこしをれうたをよミ置てあたら桜を杖にこそつけ
都筑菜種【像】
煩脳のあかすきおとす水そとの神の御つけのくし田川かも
長　斎【像】
にんにくのつれなくのこるにほひよりあさつきはかりよきものハなし

東雲菴一丸　初号五月菴千万多【像】
夏なしと思ふ葉かけの涼しさはこれやときハの松の下菴

（一ウ）

（二オ）

萩野知秋【像】

いかにせんうき年月をふる袴君ハきもせてまちよわり候

真野時綱 津島神主【像】

いくとせか福ハうちへとまねけとも鬼とつれてや外へいにけん

天野信景 法名信阿弥陀仏【像】

艸もなく木もなきのへに吹風ハ何にあたりておとをなすへき

龍吟亭龍雄 初名夜道久良喜【像】墨僊

春風にあらそハぬのも一器量柳の枝のさるものそかし

（二オ）

（二ウ）

河辺友久【像】

伊勢道もこまれよとては遠からし艸臥し身のゆけハこそあれ

川船子秋楽 加藤氏【像】

六十六のとしの春

むそちむつ下からもまたむそちむつ中からよミし年も有しに

不断菴是雄 花井氏【像】

弓張の月の宵の間むつの緒にかよふしらへや松風の琴

一片舎栗町 住犬山紐長父【像】蛸池画

よわいそと見こんで出しむら角力おもひのほかに手をとりにけり

（二ウ）

（三オ）

（三ウ）

堀竹養　【像】

なまこをハ海の鼠と名にたてと汐より外にひくものハなし

金銀斎嘯山　【像】

短冊にまかせて手むけん質の札星にハかせる衣なけれハ

秋園斎米都　鈴木氏　【像】

化ものを退治せんとのかけものに出てうれしき古寺の月

鶴園轟丸　初名蒼蝿亭多可留　【像】墨僊

山風に落ていミしき鹿のねは螺鈿の軸のかひよとそなく

（三オ）

六祖の賛に

永日菴其律　兀斎篪卿　【像】

からうすに心のしらけさとり得てほさつも足の下にこそ見れ

一酌斎桂裏　金森氏　【像】

跡先につはなの穂をハぬきもつたしらはの娘見てそつとしつ

五条坊　【像】

五丈には四丈七尺たらねとも三尺坊の御名のたかさよ

雅流園香窓弘器　柴田氏　【像】墨僊

冨士ほとの扇もかもなミつうみのほたるのかきりふせてとるへく

（三ウ）

（四オ）

蹄忍比丘 八事山 【像】

あともなき雲にあらそふ心こそ中〳〵月のさハり成けれ

半掃菴螻丸 横井氏 也有 【像】

世のことをきかし〳〵とせし耳も遠うなれとハいのらさりしを

袋の口より布袋の出かゝりたる賛　籔下太郎菴 【像】

諺のつねにかハりし画そらこと袋のくちハさいはひの門

鬼畜斎一口 【像】墨僊

子をもちし後の心にくらふれはむかしハ親をおもハさりけり

（四オ）

（四ウ）

湖月堂可唫 又云芸隠 【像】

隠居して身ハひまなれとと*にかくに出てはたらくハ心なりけり

楓左房馬六 【像】

猫ハ寝て居てもうきよハすむものを鼠ハねすになとくらすらん

文燠堂琴詩 【像】

名にしあふ月のこよひハあふみよりならよりまさるさらしなの月

朋来菴酒亀丸 又号対松舘住一宮村 酒井氏 【像】墨僊

おのか妻人をこふとてなかせをるあの畜生のさを鹿の声

（四ウ）

（五オ）

布袋川わたりの賛　　味息斎紀六林 編蝠菴 堀田氏【像】

川こしの肩さへかりぬ心から福も袋にあまる成へし

鳥　三【像】

禅宗の如意と出たるさわらひに無別法なる画賛無差別

内藤東甫【像】

うちに酒ありてはたらぬものそかしなくてたるを八樽としるへし

双蝶園麻中雄 実名源朝臣為龍 【像】哥政画

今ころはよそに枕やかハすらむわかつらいほとうれしからして

（五オ）

（五ウ）

赤松亭可童 省斎 小川氏【像】

物いはゝ白太夫とやめされなん雪をいたゝく神かきの松

三味線の賛　　般若台雲臥【像】

ひき見れハ心の外にこまもなし撥かなるかよいとかなるかよ

笑楽菴倍二【像】

老か筆もはるハわかやく文字の躰ふとく大きな帳のうハ書

方金園玉清 初号松響堂澄成 【像】蛸池作

秋ハ月冬ハちとりに夜をこめて寝る間すくなき須磨の関守

（五ウ）

（六オ）

操楽斎長耳　三友窓　【像】

すゝしくも花火の紅葉流るめり秋もたつたと思ふ川はた

一六菴寸斎　吉村氏　【像】

うらめしや外へこゝろをはこふ茶のやくせし手まへいかにたつらむ

其文　【像】

元三の大師の御鬮ふるとしのうちに取得た立春大吉

古刀菴忠長彦　俗称竹屋彦兵衛 研師　【像】墨僊

春なからしはし雪もやとり木のむつの花さへにほふ梅か枝

（六オ）

（六ウ）

指峯堂稗笑　書林　【像】

家ことに松たてんとてうつ杭ハ是としのせのみをつくしかも

慮竹斎烏川　【像】

年をへて人のか*ゝ見となる後家も落かゝるをやくもるといふらん

無住大円国師　梶原氏　【上段各像】右墨僊

遁世の遁ハ時代に書かへむかしハのかる今ハむさほる

蟠龍軒緑松雄　【像】蛸池

いつかまた袖のなミたハひむろ守とけぬにくたく我こゝろかな

（六ウ）

（七オ）

（七ウ）

梅のかけろくに香箪笥給りける時のうた　玄御方
白とあかあらそふ梅の花軍まけてにほひをとられこそすれ
六十三歳春　権僧正妙橋 尊寿院
六十三といふはかりにや法華経のもしもかすミてけさハミゆらん
元禄十五年総見寺天龍和尚碧巌録の講談をきゝて　野村宗二
きけハきゝきくほとかたき石臼の目にも見られぬ法の道かな
宝永四年十月四日大地震ゆりし時　高木某
神の旅道中つけの古扇かなめやぬけてかくハゆるらん
寄鮓桶恋　負山子越人▼

僊流園桃種人 亀丸息 【像】有文写
此いろにこす物なしとミるうちに棹をとられしわたし場の藤

（七オ）

▲すし桶ハ野良なるらしおされても同しやうなる足か三本
酒の肴に黒はせといふ物出しを紙につゝみ持かへるとて　岡田野水 備前屋
うれしさを袖にハあらて黒はせを紙につゝみてかへりこそすれ
題しらす　僧忍渓
親もなし子もなし我ハつまもなし苦なし楽なし又やともなし
秋楽より雪をまろめて餅のことくなし箱にいれこせし時　美濃守政常 鍛治●
ふりし日に化そこなひし雪女まことのすかたあらハせよかし
題しらす　至遊館南喬 知多
夜道にはちからかましや影法師ものこそいはねつれハ有明

藪中道　【像】蛸池写
忠言にあらてさいはひ郭公一声耳にさからハす聞

（七ウ）

（八オ）

（八ウ）

同（筆者注―「題しらず」）　明璘
居ながらに名所やしれる井のうちのかはつもうたをよむとしきけハ
立春　井筒屋竹甫
明てけさあまねく山のかすめるハ雑煮たく火のけふり成らん
延享二年乙丑春　仝　伍
延享もふたつ角文字我も人もきのとかなるやうしの初春
歳暮　永言斎季来
しらさしり雪や花見や降雪のつもれハ年のくれとなるもの
伊勢にまうてし時かの国
のはかきといふ物を見て　土岐利重
さたまれる言のはかきのかミ風やいせの国よりほかはつかハす

千鶴菴雛人　【像】墨僊
おく露を剝とつて行狼藉ハ風に尾花のよるのしら浪

（八オ）

元日　其梅
下戸ならぬおのころ嶋の屠蘇そよきかすの子をうむ天のふとはし
法然上人賛　其考
法然のつふりハ槌に似たはつよミなまいたに釘かきゝつゝ
元日　無筆斎緩布
あたらしい顔こそミゆれ黒ぬしもむかへハ白きかゝ見もちかな
時鳥　藤原長見
あかつきにのこれる月ハミしか夜のそらもねたらぬほとゝきす哉
同　浅野暁格
ほとゝきす客のある夜ハ鳴やらておもハぬ我をうそつきにしつ
山　竹夜坊
絵筆にもおよハぬ冨士のなかめ哉やまゝゆつくる雪の顔はせ

真帆追風　住内海　【像】墨僊
いつはりのなき世なりせハいかにせんにくしといひし君かことの葉

（八ウ）

（九オ）

（九ウ）

初秋　　童楽斎鳥兆
秋きぬとひつくりしたる枕にもこのころなれし萩の上風

雲雀　　ゝ六斎阿交
雲をこふるおもひにやせて世の人のたとへとなるを鳴ひはりかも

廿五歳春　　古二斎丁二
元日にすわる雑煮のあとハまたにしふ五さいをいはふ此はる

早蕨　　沖名斎鳥億
里人にやかれても又こりもせすことしも手をハのへのさわらひ

春雨　　亀束斎司丁
はる雨ハよしつねよりもさひしくてふるおとさへもしつかなりけり

時鳥　　索落斎南笑
ほとゝきすやう〳〵ないた一声をまちつかれたる気付にそする

麹水園龍旦【像】自画
山〳〵に霞の棚をかけたるハ人のこゝろのおき所なり

（九オ）

書　　可索斎鳥連
物いハすわらハぬふミにむかひ居てミれハミぬ世の人そ友なる

年徳棚　　桴月堂二橋
正直のかうへのうへにとしとくのかミやとります恵方たな哉

山　　暮雨巷久村暁台
あらしふく雲のまよひにたちくれてわけいるみちもふたむらの山

四十七歳にて京にありし比こゝち
そこなひてしぬへくおほえし時　　風折左京有丈 又東湖
有丈のいろはの仮名字四十七みのふるはてハ京てをはるか

初春　　芴香園俤路
うめかゝを鬢にとめつゝ老か身ハむかふかゝ見のもちに若やく

花　　稲士▼

雪花園三十日月丸 森居氏【像】蛸池造
こゝはかり日ハてらねとも出かハりのいとまよする声そくもれる

（九ウ）

（十オ）

▲花よりも団子といへと弁当も入あひのかねもわすれてそミる　詩仙舎中太

藤

賤の女かすミかなからも春ことに玉たれふかく見ゆる藤たな　又玄斎御風

由縁斎へ年始状つかはす奥に

御無事にて御越年始のおよろこひ貴翁にむかつてまをし候　貞斎春魯 後岐阜住

鶯

宵までのたけき心のかけこひもけさうくひすの歌にやハらく　桴雪

風吹ける夜火のもときつかハしく見まハるとて

風ふけはおきつ火のもとミにまハる夜半にハ気味かさてわるいなり

ある方の杜丹を見て　田中杜石 儀竜▼

胡椒亭呑丸【像】蛸池製

とりいれてくれぬ恨のなミた川いかたにくたすほとの錦木

（十オ）

（十ウ）

▲ねの高い花を八園にうゑあつめなかむる人そ冨貴卿なる

元日　狸士

雑煮よりまつ水さしにいもかしらいさ大ふくの朝茶いハヽん

雪中梅　大口素琴

梅か枝にふれる雪さへ香に匂ふけさは目はなの正月そかし

老人　蝸牛

眉の霜ひたひの波をうちこえて頭に雪をすゑのまつ山

立秋　一陽斎柳生

宵までのあつさのかちを取かへて一葉のふねにけさハすゝしや

也有老人へ大根の沢庵漬といふ物をおくるとて　尓遷

奈良漬におとらぬあちとおもへとも▼

金輪斎今谷豆成 麸万隠者住 玉屋町【像】有文画

百日のてりほと長うおほえしは花にゆふへの一時の雨

（十ウ）

（十一オ）

（十一ウ）

▲かすかなけれはいかゝあるらむ

月　　　　　　楽　山 知多住

ひかりをハ花とも見れハいも団子月のかつらの実とやくハまし

盆の上に火縄のありしを見て　　服部玄水

盆ならハをとり子にてものすへきに三月めいたひなハ何事

神祇　　　　　櫟木園市橋問泰

もみ手してきねかぬかつく御社ハこれ田の神といハてしるしも

無月　　　　　後藤方庸

かくはかり雲をへたてゝいたつらにこよひの月の名のみふけゆく

湯豆腐を多くくひて　　朝　乎

さとりよりなむおミたうふなんせんも本来くふにめんほくもなや

珠弄堂環丸々 俗称瀬戸治部九郎 【像】有文画
はさみをもいれしとおもふ松か枝を月かすかしてのほる涼しさ

（十一オ）

十五夜　　　　宣　千

二千里の外もこよひの献立は三五夜中の新月の芋

花　　　　　　岡田左竹

花さかり人のこゝろのうかつくハこれもさくらの谷にそ有ける

秋の花といへる集の執筆をして　　樗園子左笠

追善のこかねはなさくことのはをこまさら筆にかきそわひぬる

八十八賀をいはひてほとな
くみまかりし人をいたみて　　竹山洒石

よねのまもり書て身まかり給ひけりこれそまことのほさつ成らん

雑煮　　　　　朧月菴二泉

雑煮にもちりかゝるをや花かつをにほひよしのゝ椀にもるらん

玉流園黄金沢丸 初号文言舎田丸 【像】有文画
鳥の目の銭のひかりハひくれてもちうをとはする旅の竹駕籠

（十一ウ）

（十二オ）

（十二ウ）

旅行の時　　節分庵本多伯馬

かゝ見山くもりてミせぬ名月の空をうらむな天下一めん

上巳　　ひさ女 米都妻

桃の節句もゝのさかつき数そへハもゝさえつりやもゝちとりあし

帰雁　　左　十

くらきよりくらき夜道をかへる雁はるかに花の火をともす比

杜丹　　五老峯岱青

とり〳〵によろひたてたる杜丹哉一二の木戸やあくる短夜

歳暮　　爰居亭石久 犬山住

いそかしの年のくれやといまそしるむかしハよそにきゝしまかなひ

寺杜鵑　　淇　流

本来の空に声あるほとゝきす禅寺とミて一句かけた歟

（十二オ）

寿亭緑亀雄 佳山口俗名山田亀三郎 【像】墨僊

風の香も軒つたひせり咲花の雪にもうつむこしのやまさと

永楽屋何かしかもとにてもの書ける時　　銹屋清狂

名にしあひてなかくたのしむおもしろさ書に画にふける時もこそあれ

落葉　　潜龍蝸小鹿無孔笛

赤旗の十万余騎とミしもけふおちていくたの森の紅葉々

卯花　　春秋園竹葉

築山のつくしのゑとり雨に落てもとのしら地とミゆる卯花

水仙　　僧許水

冬ことに孤ハまとへと水仙の花ハ貴人の上座とそきく

暮春　　綿屋蘭渚

もう夏へうちこすはかり俳諧の月花の座もあそひくらして

待子規　　花井小蔦

ほとゝきすまつやつんほの早合点▼

針道学女 友栞妻 【像】玉僊㊤

来る年も〳〵さくうめの花古くさしともおもハさりけり

（十二ウ）

（十三オ）

（十三ウ）

▲なかぬ先から小首かたけて

花　　清藤

春なれや霞のまくに花むしろこのたのしミにしくものそなき

題しらす　　専寿

冨士川のみなもとにすむ水鳥や平家の武士をおひやかしけん

恋　　志孝

しのふ身のこゝに有ともしら川のせきはらひさへならぬつらさよ

虫　　片帆舎川柳

蚓とゝもにかりこめられて轡むしうまやのすミにねをのミそなく

題しらす　　野村不誰

松の木の巣ハ何の巣となかむれハすたつた跡ハからす也けり

鳳巾　　叢々亭義行 不誰息

禅法のいかなるか是落る所▼

呂喬斎宇田種風彦　【像】蛸池

ほとゝきすわたらはなけとこちからも一声かけた橋の曙

（十三オ）

▲庭の柏樹に引かけてけり

大師粥　　僧万愚 知多住

自他宗にさめぬ止観のあちハひをあつきの粥にしる大師講

后月　　大橋喬二

いもハ先かつら男ハのちの月ふたつちかひのあまのはらから

同　　可紅

豆ぬすむ身をかくすへき山畑にあまりくまなき後の月かけ

立秋　　竹渓堂芝嶺風 初万言 斉可興

汗になりしかたひらの襟ひいやりとこのあかつきに秋ハきにけり

恋　　荘周菴如蝶

寝つおきつかふりふるまてまねをするふたり寝る夜ハゆるせ影法師

大師講　　姫　柳 如蝶妻

顔に年よらハよれ〳〵粥くひて▼

清音館龍之調 伶人日比野氏実名源正栄 別号紋多楼　【像】自画

浪にうく月のかゝ見にいせ嶋のひけそる海老もミゆるさやけさ

（十三ウ）

（十四オ）

（十四ウ）

▲おなかのしわをのす大師講
貞柳十三回忌に翁の時鳥のうたをおもひて　松夕菴有琴
十三年さそよみための歌やあらんきゝたけれともゆくことハいや
六歌仙を画くとて　埜　十
うつすともえこそおよハねうた人の数むつかしきすかたかたちハ
十六夜　満陽堂大扇
二千里の旅のやつれか面かけのすこしやつれたいさよひの月
歳暮　以　桂
くれそめてかねやはらひにつきにけんのこるハ耳に寺〳〵の鐘
立秋風　筠葉斎青鸞
岩のやうにかたまりてたつ雲の峯▼

栗洒屋印籠紐長　住犬山祠官　【像】蛸池作
薬水のめやいきとしいけた酒すくれは人のいたみとそなる

（十四オ）

▲くたけてとふや秋のはつ風
三夕賛　其兆菴五朧　犬山住
たそかれに三人よれハ歌ハけに文珠もしりに敷しまの道
年内立春　免陸菴米陋　同
かけ乞のおとハ聞つゝ大年の関のこなたに春ハ来にけり
萍　楽菴羊我　同
まかなくにと小町かよみし萍をみる船人のいろの黒ぬし
松間絵馬　仕候
松の間にミえたる絵馬ハ千代かけて色かへしとの恋の願か
遊女納涼　秀弧
川辺さしてすゝみにきたるうかれ女もともになかれのゆくへさためす
祭角力　素桃
豊年に祭すまひのはたか麦▼

和楽園春光　初号山霞亭三重業　【像】墨僊
わかれ路の涙へたてし不破関あれなりにしてあハぬこゝろか

（十四ウ）

（十五オ）

（十五ウ）

▲ふとしはかりハしろい百姓

鮎　路羊

孝行に母のこゝろをくミてしる小あゆハよめのさとへ家つと

社頭鳥　可用

正直のめぐミに鳥もあふ坂やそらねもなくてあけの玉垣

祭角力　季谷

むら〳〵にいハう祭の花角力名のりハ豊の秋津しまかも

儒者恋　楽斎善

聖賢の道かなきれて恋のミちいろの初学の床にいる門

小川屋可童を師とたのみて　一鼎 犬山住

名に高き小川の情ふかゝれとこと葉のはしをかけてたのまん

題しらす　紫筍亭右節 同▼

一陽斉輿馬鬼影 前山氏号 市楼　【像】墨僊

竹の根の鞭に成ともしらねはやあれてほり出す野へのはる駒

（十五オ）

▲またあつい中から秋のたつた山夜半にハきみのよい風そふく

籔鶯　可幸

医者よりも籔にすむてふ鶯のさえつりきくも気のくすり也

恋　里水

くとけとも落ぬに恋ハますいかのうハの空なるこゝろうらめし

元日　漆園斎蝶吾

さるほとに鳥啼かねも告そめて霞や天にミつの明ほの

同　可泉

けさハまた心もわかくそみかくた鈴かけいさむ春こまのおと

藤下遊人　芦暁

藤なミの庭のなかめも長き日にいかりおろして遊ふ友綱

六歌仙の題のうち康秀を▼

折柳亭薬研鍔丸 薬店　【蛸池】

欄干にねふりかゝりて川そひの柳も見るや夢の浮はし

（十五ウ）

（十六オ）

（十六ウ）

▲つくりて　素白
うたのさまやすらかなりしやす秀ハむへ此上もあらしといふらん
杜鵑　幽竹斎蔵甲
果報をハねてまつよりもうれしきハほとゝきすきく朝起の徳
社頭梅　骨伯
正直のかうへをさけし参詣のぬすまぬ袖にやとる梅か香
鳳巾　僧素外
三輪の山のとかに春のいかのほりありたけのハすをた巻の糸
寄畳恋　里洲
床入もまた水あけのあけ畳君にあふミのおもてはつかし
社頭　暁之
雨風もはらひきよめて御社にてるとうろうの月のほりもの

千歳亭其儘忠典　【像】墨僊
仏をもつくる雪には一ねんのほつきとをれし鬼松の枝

（十六オ）

恋　文樵
さまゝゐるのふミに行灯かゝくれハりんきかむしの火をけしにくる
社頭月　柳西
有明の月のてらせる浜宮ハ鳥の羽風にきえぬとうろう
時雨　茄子亜紀成 初鵜陀
気ちかひのやうなることよ初しくれいつはりもなくまことてもなし
藤　露南
入船のみなとゝまりてミる人や藤なミよする春のなかめに
待恋　烏雪
こよひあふと便ありまの筆なれやまつにハ閨を出たり入たり
苗代　烏橋
苗代ハ碁石ならねと一面にすみ／＼までもめをもちてゐる

本街堂石川亭　【像】玉僊写
のり合の耳をそろへて郭公なく音にかたくよとの川舟

（十六ウ）

（十七オ）

（十七ウ）

七夕　南明

ゆつくりといかりおろしてわたし守星のわかれにふな出いそくな

同　東斎八雞 初也景

仲人もいらぬあふせの天の川かけむかひにて契りそめしか

待子規　菊泉亭里童 後江戸住 土師搞安

ほとゝきす一声ないてくれむつのかねからかそへあかす短夜

十三夜　烏月

いのちこそ物たねなれと先いハふちとせの秋のまめの名月

初春　烏夕

みとり子のむつきそめて花鳥のはつねうれしき産たちの声

立春　可栗

目にはかり正月てなし心からほゝゑむ花の春ハ来にけり

蓮貫院釈道 【像】蛸池画

つめに火をともす心のあさましや一寸さきをやみとしらすて

（十七オ）

小川屋可童に初めてあひて　橘千樹

石川やせミの小川屋来のけれハ名をたつねつゝ諸方よりとふ

可童三回忌に寄謡懐旧といふことを　茶和 一ノ宮住

なき人のかた見ととへは松風にみとせかわかぬ袖のむらさめ

七夕鳥　籏綾館蒲洲 鳴海住

それかとてみれハまことかうそも琴ひいて手むけんほし合のそら

上巳　百川斎学海 同

目にしほひ口にあまかつはふ子さへひなまつりとて立てよろこふ

山月　伝芳窩酔霞 同

けふをはれと影をうつして鳰照やあハせかゝ見の山の名月

曲水　白鴉亭谷丸 同▼

勇々館大江深淵 初号玉照堂艸 望又音丸 【像】自画

甲ほしに出たる亀もぬれにけりうらなひかたきしくれそらには

（十七ウ）

（十八オ）

（十八ウ）

▲盃のまきゐの亀もおのつからなかれにうかむ曲水の宴

七夕　周竹舎綾丸

たなはたのまれにあふむのひとよさハさそな恋しと同し口まね

雛　東窓舎露友

ひなの日ハ座敷ものへの匂ひかなもゝに柳にさてくさのもち

桃　遍竹斎友之

源平のいろをあらそふ花さかり日本一の谷あひの桃

山月　素竹斎俊丸

咲そろふ花の春よりよしの山もなかの月のたつた一りん

曲水　不捨亭徳丸

曲水のなかれにうかむあふむ盃くミてこゝろも同し口まね

同　暁貞館巴交▼

葵翠菴坂井中墻　別号李松軒　【像】蛸池作

一もとの小萩を手折る袖の上に月のたはしる那須の野の露

（十八オ）

▲川下に盃ハもうをさまりてまた三日月のかけそなかるゝ

題しらす　津金胤臣

茶ハ茶くわし酒ハさかなに酌女出ましきものハ猫子とも婆々

裸参詣　足立氏

足とめて雪うちはらふ袖もなしはたかまゐりの冬の夕くれ

七十賀　馮里楼坂下住人　中雄父

七ふしをこめし篿にときハなるまつのちとせをかきやあつめん

恋　菜花園利根裏成　同兄

打とくる深きこゝろの底紅ハさしもいろよききちきりなりけり

同　網引方

忍ふ夜ハ相図のかねと一時に胸の動気もうち出しけり

同　良村安世▼

秋日登元禰　【像】玉僊写㊞

三日月の眉落てより女郎花さくのゝうつらふけるなりけり

（十八ウ）

（十九オ）

（十九ウ）

▲うき人を雀の千声くとけともおつる返事の一声もなし

変恋　小川多之寿

おもひきや起請のちしほ引かへてまつかなうそとかハるへしとハ

無常　大小栗方

から〳〵と見し金性の人たにもきえて位牌の箔とこそなれ

午歳のくれに　八嶋勝時 八嶋新田

光陰のやたけこゝろにむちくれてうまとしの尾のかけはらハ、や

母の忌日に雪ふりけれハ　橘一枝

おもかけをつくりて見はや雪仏きえし者にまたこりもせて

落花　老多久楽 玉涌父

千金と見えし桜も咲ちりてもとねにかへる市中の花

五眠亭鼾高成 松田氏住一宮村 【像】墨僊

手道具のなきわひしさもひとかゝり寝所すゝし夏の夜の月

（十九オ）

寄儒者恋　平秩東作 平嶋人 後江戸住

あつめつる蛍にこかれ雪にきえおもひにしみの家となるふみ

春月　麻直成

花を見し目のくたひれを休めよとかすミに覆ふはるのよの月

恋　石籠六女

なとてかく涙のふちにしつむ身そふかきおもひのぬしにひかれて

七夕　巌松胤

恋のふちより浅からんわたるせ*にほしも飛こめあまの川なミ

霜　隣蓼輔

人の手にあたる的場の卿鹿も霜かあたれはまけてこそゐれ

蛍　一升事樽

夏むしハ小尻てひかるものゆゑにさひけのみえぬ夏のゆふくれ

二水楼二水 初名片絮台曲流又 角南読尾 見田氏 【像】自画

おほ空をおのかにほひにかすませて月にあやなき春の夜の梅

（十九ウ）

（二十オ）

（二十ウ）

恋　　鹿子結女
人もわれも同しおもひハあり明とうしろ見すれはうしろむくかけ
鶯　　紀若女 椎本住妻
鶯のそたちも山のふところ子ねん〳〵春のころ〳〵になく
夕立　　自分館発興
東西とわけてふれるや真宗のにしをたてたるゆふたちの雨
待恋　　方十園篠埜玉涌 玉涌父
かならすとちきりてこよひあひおいのまつハ久しき物にそ有ける
初鰹　　後方十園豆長兼成 同兄
はつものとねも高砂のまつの魚万民これを賞翫そする
松　　野田畦丸 初衣午森住
からかさのやうに梢ハひろかれと雪にしほまぬミねの老松

繁重楼猛虎丸【像】墨僊
姑は孫うめと嫁をなつるよりたゝく情はふかき粥杖

（二十オ）

恋　　独吟斎
おもひのミつもりて胸のしやく時計あハすハ何を玉のをにせん
寄山恋　　歌蔵菴曲児
胸のけふり富士ともミほの浦風になひかぬ恋をするかかなしき
桜貝　　芦間蟹丸 初東花
たつ浪の花のちりてや水底にありけるものか此さくら貝
古寺雪　　吉田真祢久 犬山住
鳴鐘のおとハさとれと三井寺の雪にかへらう道とてハなし
七夕　　夏山茂躬
行水のなかれハたえぬ天の川ちきりももとの月日てハなし
寄関恋　　余程道則 津嶋住
我恋ハ人目の関をぬけ道かいのちひろひにあふそうれしき

酔菊菴升人 佳熱田【像】墨僊
風さそふ時雨に笠やとられけむぬれたやうなる月そもれ出る

（二十ウ）

（二十一オ）

（二十一ウ）

時鳥　霞雀
たれ駕籠のたれにもらして時鳥前とうしろのかたにきいたり
露　風月菴白髭長児
露ハ質のしろ物ならて艸のはにおくもありまたなかるゝも有
初冬　真坂時成 熱田住
長月もなこりの露の玉手箱あけてハ霜の白髪をやミん
霞　開栗菴知一坊
大仏のかねもおほろに聞わかてはるハかすミに遠き耳塚
炭竈　桂伴俊
夕けふり立居に賤も縄たすき身に引かくる炭やきの業
初鰹　真柴亭八重垣 犬山住
朝市にねも高くたつゐほし魚頭にのつてくる相場商ひ

陶亭広人 住瀬戸陶工春興 俗称加藤甚七郎 【像】墨僊
いせさくら花の雲津の白たへにからすの森も鷺とあらそふ

（二十一オ）

不邪婬戒　馬内子
山まゆのいとしとおもふ君よりは外の色にはそましとそ思ふ
山家鶏　可添
世中をしらぬ深山の住居にも時めくものハくたかけのこゑ
七夕別　五大幅朋信
彦星のいそけと遅き引つなにうしやわかれをつくる鳥かね
萩　艸花好成 熱田住
秋風の手をたのみつゝ袖垣のやふれをぬハんいと萩の花
残雪　葎侘住
ひとくともなき谷の戸をとつる雪こやうくひすのるすにのこせる
山家　陽楼滝丸
馳走ふりする塩鯛の眼のはたも引こんてゐるやまの下菴

五涼軒綾丸 【像】玉鳳
手弱女かとり得し顔に紅葉して春よりわらふ茸狩の山

（二十一ウ）

（二十二オ）

（二十二ウ）

七夕　古井中守
一とせのこらへふくろや縫つらん星にかすなるけふのいろいと
水鳥　朝起常成
人の身の薬となりて味鴨のおのかいのちをおとすはかなさ
花便　洗卓斎貫成
山家より花の咲しとつけの櫛はをひくことき人のたよりに
恋　桜木業好
あんしたる心も今ハはなれ貝あひてふたりか床そわりなき
若菜　春田造
またよにもけのこる雪のかすか野にしかともわかぬわかなたつねん
筝　賓導堂讃音成
鶯も音をはる籔のたけの子ハ皮のつき日に星の班もあり

清晴亭湖暁　【像】蛸池 善悪は生たつ松のきゝにして鬼の名もありけさかけもあり

（二十二オ）

松　塩水清女 音成妻
塩風の手になれたる枝ぶりハ舞子か浜の松のとりなり
夏月　以座屋鶏老
むらくものくまてはらひて月の弓なかれてすゝしなつのうら風
梅　巨燵山守 有松住初名千代住 *
くる春のみやけに花のはつものを山からさとへくはる梅かゝ
信濃遊行の時　枇杷園士朗 井上氏
甲斐かねを出てこし路に入川のちくまにものをおもひけるかな
泉　袖屋月町
名所のいつみハこゝといはし水弓矢八まんいつはりハなし
子日　稲穂鈴成 北渴
朝鷹のことくつかんで小松引千代のためしをちから艸にて

見小菴福入人 田中氏医官　【像】墨僊 野分せしあしたの庭の女郎花壁おちにきと人にかたるな

（二十二ウ）

（二十三オ）

（二十三ウ）

別恋　千代松年
きぬ〳〵のかねにわかれのつらさよりけさハめにつく君かおもかけ

春月　知竹斎一通
千金の春の夜ことのミせつきに月も霞のうす化粧して

花　腰障子美濃紙
さかりそとけさハよめたり枝折してふミのあけ行花のしら雲

森藤　玉　守 犬山住
よしつねのはゝその森も春くれハ松のときハにかゝる藤なミ

照射　大籔菴虎丸 同初名池良成
さを鹿の脊山の照射とひ〳〵にさし毛のことくのこるあかつき

月　薄菴伏屋月盛
てる月の影にハ秋のよもきふにつれてすくさまあさまてもミん

一円舎一方 熱田住 【像】墨僊
みるからに老をやしなふ山桜酒とくませよ花の瀧津瀬

（二十三オ）

春駒　楊弓喜理人 犬山住
夢に見てさへよきものを春くれハ冨士のすそのに遊ふ春駒

梅　浦浪女 同
一枝をたをらは指を切へしと心中たてしなにハつの梅

鶯　蓬嶋人 熱田
うくひすハ花のちふさを見つけてやもう鳴いたす山のふところ

水鳥　旭松堂扇折風 一巴亭
水鳥ハうきねに夢やむすふらん鷹をミぬのを仕合せにして

山家　浪静丸
鍋釜もよそにはつれし山住はありしむかしにゝるものもなし

蓮　櫟尺長
極楽ハこゝそはちすの花さかり只蚊のせめもわするはかりに

琅玕亭呉竹根春 【像】墨僊
をくら山見れはあれたるふもと寺今一たひの建立もかな

（二十三ウ）

（二十四オ）

同・

たはこの火一切出し不申とことはるあたり飛ほたるかな　紀好輔 初産雛人

菊

いつまても老せぬ菊の薬酒もりあけて見る七咲の花　箕手はかる

紅葉

むかしより紅葉の錦とり〳〵と筆をもそめて名にたつ田川　弦掛一升 初谷月橋

題しらす

春霞たちし屏風のうらかたや雀の声にあくるしのゝめ　片糸従頼

早蕨

年〳〵に根ハますかけのさわらひやにきりて見せぬ山の手の筋　瀧白玉

梅

雑煮椀あくれハ春の花かつをもりきてうれし窓の梅か香　虎魚狩

後一巴亭要季丸 初号百合亭 天野氏 【像】有文画

やかて咲花まちかねて桜木の炭に枝折をむすふ門松

（二十四オ）

（二十四ウ）

寄鴨恋

かくおもふをたれいハふちの鴨の足ミしかやそこへふミもとゝかす　水角奈志

逢不遇恋

我恋ハあうむかへしのあうてのちいちしにかはる君かことの葉　一万斎三宝長熨斗

鹿

角ふりてつまこふ鹿ハ紅葉ゝをふミつけてなく水くきの岡　伽羅鳰人 初九足斎 於丸

題しらす

やミの夜に白酒うりの声きけハうまれた時のちゝそ恋しき　丸屋墨湖

歳暮

かけ乞につめられまいとおもへとも御手にとゝへハ金銀ハなし　凫水亭磨風

七夕

恋わひて石とやならん七夕のさこそまつらめ星のさよ姫　艸菴住

鎧堂平性津鶴 俗称御武具屋 惣左衛門 【像】有文画

手をとりし竹も弓ほとたわむまてつるまきのほる朝顔のはな

（二十四ウ）

（二十五オ）

（二十五ウ）

汐干　　松風亭有年
目薬の貝の玉をもひろはゝや汐もそこひとなりし海つら

鶴　　冬野雪満
風をいたミ岩うつ波にぬらさしとまくりあけたる鶴の毛衣

遅日　　十足斎
むちくれて早きさらきの初午ハよほとはるひのひて候

秋夕　　速斎中丸 犬山住
たそかれの花をなかめし夕顔もひよんなる秋となりひさこ也

雛　　酒家蔵人 同
青麦のほをはらむ比賤か家にはたか小僧もまつる雛棚

寄湖恋　　紀儘好
いひよらんしほなき海と知なからあふミの名をハたのみにやせん

（二十五オ）

銚子亭久波倍　【像】有文画
葉をたれて門の柳と見るまでに軒にいつもとふくあやめ艸

五月雨　　海士網曳
日ハけふもおるすとなりてかけ膳のいつあかるとも見えぬさみたれ

恋　　在雅亭起蔵坊 熱田
ひさかしら抱て寝る夜そうかりけるとにかく妹かうけぬ談合

花　　芦辺庵汐満 同
さくら狩うるさきものハ女房とはなについたる入相のかね

旅　　盃数好 同
つり棹のいとの長旅する時はかゝらぬうきを見るはかり也

蛍　　砂原春風
こかすてふ火ふたを切て飛かふハ鉄炮垣にすたく蛍か

恋　　呉羽安伎
しらはさへ君ハ見せすて竹ミつのミをうらみたる恋そくるしき

（二十五ウ）

楚山亭玉駄　【像】玉鳳
あれミよと鴛籠つる人におこされて冨士ミる夢をさます冨士の根

――未完――